重修真書太閤記　七編　九

459
69

へ13特
門政
號 459
卷 69

消 福井

重修直書太閤記七編卷之二拾五

柴田勝家越中國亂入の事

并河田豐前守勇戰の事

柴田修理進勝家ハ武田勝頼滅亡の後甲信上駿の四國闕國とかうしうべ駿河ハ濱松の御領ゑ加え甲州半國ゑ信州諏訪郡と川尻肥後守ゑ信州更級高井水内埴科四郡と森勝藏ゑ伊奈郡と毛利河内守濃州岩村と蘭丸ゑ賜らし越後國と切取て領國ゑとゞめと望申とし信長ゑも越後國ハ上杉不識院謙信以來今の景勝まで相續して國民ゑ

政印

く懐き從へべ容易く平均し難しと思られし處ふ
とべ早速く聞濟まひ手柄次第と許容ありけるふ
ろう勝家越中國へ下向と織田殿まも柴田に隨一
の功臣といふとなく加勢とて森勝藏に信列る
り小田切口へ働くべし瀧川左近將監に義大夫と
共に上列沼田ろう三國峠へうう清水淺貝へ亂
入とべしと下知しまふ
越後國に元來上杉民部大輔憲顯康永二年尊氏
將軍ろう拜領しつる國にて嫡子兵庫頭憲將
に傳ろう其嫡子左近將監憲榮ろう民部少輔房
方兵庫頭清方左馬助朝房民部大輔房能と領し

來りしと長尾為景房能を兩溝と云處にて弑し
越後國を奪ひしなり為景の子即不識院謙信入
道なり謙信天文廿年廿二歲にて家督をし時
に長尾景虎と云後政虎と改め弘治二年廿七歲
上杉と改め永禄二年三月三十歲將軍義輝卿に
拜謁し一字を賜ろう輝虎と改め關東管領とふ
さる三年三月二日落髮して謙信と改めしなり
天正六年三月十三日没ひ行年四十九是年喜平
次景勝廿四歲にて家督しなるべ天正十年八廿
八歲なり
勝家大に悅び如斯諸方ろう攻入べ景勝ろう程勇

猛なる共何るどの事うあるらんと子息伊賀守勝豊
甥の佐久間玄蕃允盛政加勢ふい前田又左衛門佐
佐内藏助其勢四万五千餘騎越中國松倉さして押
寄るう

一書ゑ柴田修理進勝家い天正四年佐久間玄蕃
允盛政ゑ加州を伐取進退とべ〜叔父修理進加
勢をべ〜と仰らるとし時らゞめて加州へ發向し
その〜ち八年閏三月九日ふゝび加賀國へ亂
入し湊川手取川と打渡て宮腰ゑ陣を取越中の
道筋安養寺越の邊まで押入ると云越中國三戸
田冨山の間ゑ安養坊と云處あり是なるべ〜是

ゑう加州尾山の城ゑ佐久間玄蕃允御幸塚ゑ徳
山五兵衛大聖寺ゑ拜郷五左衛門越前丸岡ゑ柴
田伊賀守勝山ゑ柴田三左衛門東郷ゑ安井左近
を置能登國飯山ゑ前田又左衛門を置る是い偏
ゑ越後の上杉景勝を攻らるとうゑ為なると聞え
し〜と云

此由越後へ聞え〜ふい景勝うゐて左あるんと思
ひ〜とゑとて自國の小ぞう合を棄て越中へ出陣
をゝるべけれども此時芝田因幡守治時いさゝの
男色の事ゑゑう景勝を怨むるあるうゑ己ゲ居城蒲
原郡芝田の城ゑ楯籠う謀叛の色を顯ら〜當春ゑ

う合戰ゝ及ひけるに上方の注進ゝうう越中松倉の城へ河田豊前守魚津城へ城主吉江織部正と早々差のゝと其外末盛戸山の城〳〵加勢とゝ長嶋城主吉江喜四郎築地の城主中條越前守并ゝ竹股三河守寺嶋六兵衛横田常陸入道と始其勢五千餘騎と引率し越中さゝと馳登る

一書ゝ越中國魚津城主吉江織部正へ為加勢松倉城主河田豊前守并ゝ左の十三人の面々依景勝下知罷越ゝ處敵大勢ゝ被圍及難義ゝ由相聞ゝゝ付何とぞ保ゝ様ゝとの義飛書を以申參ゝ由中条越前守寺嶋六藏吉田善四郎亀田小三郎

藤丸新助安部右衛門山本寺松藏竹股三河守建部掃部久若林九郎左衛門石田采女正長與次吉江常陸入道と見へ此時の事なるべゝ

扨やゝ〳〵龍川ゝ寄ゝと云なる三國峠〳〵清水の城主栗生美濃守椛瀉の城主栗林肥前守松本左馬助高橋修理亮其勢三千餘騎と差向らゝと小田切口森勝藏の手〳〵苅頼城主安田惣八山岸右衛門尉登坂刑部安田筑前蠣崎和泉守嫡子與五郎光利檢使ゝゝ新津丹波守と差添信濃堺へ打て出る次ゝ柴田因幡守の押えゝゝ志の岡の酒井新左衛門尉下条采女正板原左近色部主膳正桐川治部少輔黒川

左馬助検使として築地薩摩守と添て其勢七千餘騎前後二隊に別て三方に備へて景勝居城春日山へ本庄出羽守父子秋原常陸介鉄上野介岡野左内を留守居と定めて岡野下野守佐藤平左衛門尉丸田周防守等い面々の居城に引籠り何方へも向ふべきとぞ定めける景勝直江山城守兼續と先陣として右に宇佐美駿河守同孀子民部少輔定房左備に長尾伊賀守近習に倉田佐五之丞松本外記名山太郎兵衛佐口傳吾生駒右馬允本郷金彌とぐして其勢四千五百餘騎後陣に丸田伊豆守等と先として六百餘騎都合五千餘騎一左右次第魚津表へ出張せんとぞ擬らとする

魚津は越中新川郡なり越中越後の堺を堺川と云川より東は越後頸城郡なり川より西は越中新川郡なり一里廿九町にして越中國泊宿二里廿九丁にして舟見宿一里十七丁にして浦山宿一里廿七丁にして三日市二里にして魚津なれば堺川より凡九里三十丁なり堺川より春日山へ凡十五里なり

斯車にて有べうべき北条氏政上州路へ打出たらん時の押として車返丹波守岩井備中守坂田大

膳亮父子小川圖書小田切所左衛門、永井谷左衛門、青木新兵衛以下三千七百餘騎を率し上州埜利根郡藤原谷川の奥より向て陣を取是みな謙信以來取傳えたる弓矢巧者のふ〻處なり柴田勝家い四万餘騎の勢を三手に別松倉の前後より切入らんと計りける上杉方にてい此由を聞松倉い要害あしく然も小勢なり上方の大軍に向て何と軍のふあべきや魚津い要害なれ此城に楯籠りて決戰をべし横田中条の老武者たちと評義一決しけるに河田豊前守竹股三河守いな〻左様に有すんきなり敵何方とも云其旗とも見ぬに城と明んと存もらるゝと言ける處に吉江織部正敵い地の理を知り味方い案内者なり敵い兵糧の道筋あしく進て急に討ん然るべしと大将つも此由注進をべしとぞ定めける織田方の勢越中國へ著と直に神保安藝守父子椎名孫六菊地入道馳加たりしに松倉を押置魚津の城へ向ひけるに上杉方の勢越中能登の堺宮崎に出張せし由聞えしに椎名菊地と差向たり上杉方畠山彌十郎義春赤田の齋藤下野守石動山城守朝倉游佐西三宅河田軍兵衛五千餘騎魚津の後援に打て出天正十年四月廿五日の夜河田豊前守い松倉の城より五百餘騎に

て切て出神保ゞ備へ面も振ぞ切て掛う豊前守一番ゝ鑓と入東西南北ゝ突伏〳〵馳めぐる神保父子立足もふ〳〵切やゝ〳〵ゝ既ゝ危ふく見へ〳〵處ゝ石黒勘十郎と名乗て掛へたる河田是と見て相手いとゝ〳〵死狂の者共と下知〳〵つゝ切てい突突てい切荒やゝうけるゝうう神保も石黒も叶ぬゝ佐久間玄蕃允ゞ陣へ走入て息繼居たう佐久間も此勢ゝ狼狽し右往左往ゝ散亂しける其隙ゝ豊前守い抜山傳ひゝ宮崎ゝ備へたる畠山ゞ陣へぞ走入たうさしも鬼神の如くゝぞへゝる佐久間一戰ゝ破られ口惜くいあめへども案内知ぬ山道ふれ

い拳と握り歯と喫てあそ扣えけゝ

河田豊前守菅西を討事

并河田旅亭ゝ於て信義の事

河田豊前守上方の大軍とのゝ負ともをゞ一夜討ゝ討破りてのち兼津城へ入城をゝ謙信以來弓矢の穿鑿つまりたる故ゝもあゝゞ豊前守い織部正の弟吉江喜四郎と深く断袖の交りありつゝべなりそのゝめを聞べ元來河田豊前守い今川治部大輔義元の兄花倉の良真法印ゝ仕えゝゝ小姓ゝて河田八雲と云ゝなり然るゝ義元の近習ゝ菅西角兵衛と云もの河田ゝ種々言ゝうゝど

も八雲更に返事もなく徒に月日を過しける程管
西らつと思ふ様いろ〳〵もして良真法印を失ひた
らい自然と我志をも遂てまつと案じ付それゝ
良真法印謀叛のよし〳〵と讒言したりもてなし
義元更に聞入ざりけるゆ度重ありけるゆへ終
に義元是を信じ兄弟不和なりぞ成ぬけりそれゝ
てい双方に申分出来うしろめたく天文五年六月
十日良真法印を討てけり八雲あの事を憤りい
その根元我身なり出し事なれば捨置べきにあら
びとおのひ定その夜竊に菅西が旅宿に忍び入角
兵衛を指殺し首を取側に有ける鞘の筥に納めタ

と帛にてつつみと包こ國境にのこり梟木に曝さ
べ〳〵と是を荷擔して立退けるゆへこゝに寢むひ
兆ありべ山中に一睡し眼さむしべ歩こ行ともな
く箱根の湯元にいたり田中小左衛門と云のゝ
家い知るべ〳〵あるべ入て休息しけるに小左衛門の
ひうむ敷取まろふひ一日二日を過しけるゆ八雲
入湯の留守へ旅の武士来り同〳〵小左衛門が家
に宿りけり然るに其供なる下男誤て主の包と八雲が包
とを取違へ主の座敷へ入置たり主い我包なりと思
ひ是を開さけるに内に人の首級を入さうその
者大に肝を消元の如く〳〵に包こ人の見付ざるを幸

みてゝめの處へ返し置てのち熟と思案するに人の包と開き見て知ぬふりをするも男らしからぬいで其主に面會し理いろんと思ひ定め宿の下女と頼みて其主と尋聞に八雲なりそれより下女と謀りて八雲に面會をなす年いやうゝ二八に足ぬ若人の色白く眉目美しき少人なり彼武士一目見るよりうつゝの心醉となりけるゆ威儀正し某御邊の包と思ひ違ひわゞと撰て心付御邊の坐敷へ返し入てひゞ知ぞ顔して過しを武士の意地立申さゞ依て申入てひなり此上い御邊の御手に掛らるゝ共すゝい我手に自殺しゝまう御邊の御心に任せ

ゞゝゝと申てけり八雲い始て此を知これい存もらゝぬとと仰らるゝのゝふ某ゞ包と御邊御覽あるつる由我等い一向存不申たゝめるう封印も無之包こなりたとひ御開き御覽あるつるとも何とゝて我等夫を知べきゆ然ると御心をまゞとて左様に仰らるゝ御心底ていたとひ箱の中を御覽あるとも只今仰られゝ如く包を解しでゝう中い見ゞと何處まゞでもその分ていべゝ必竟中と御覽ぞゝまぬと申御身ぞれに御身と果さんと仰らるゝなるべゝ然らば此後とても中と御覽あゝとゝ仰らるまゞこなり中と御覽も無に御身

と果したまふと去ることゝ詮ふさることゝひと申さうべ彼武士小人まへ驚入る御戈覺我等式の及ぶ處まあらべ然べ彌左様ま思召ひ哉といひひるまま八雲我等も侍のめるさらべにい少も偽申さべあるら御命御とて有まと申さうべ彼武士大ま悦びいうさまま人の包と開るさらべ知ぬと幸ま其儘まま過ひと侍の道ふべと存誥てひうう我命と捨て身晴まと思付い處い男らべひべども我等仕官の身まひべあて湯治の暇と申請許と受て其後ままてひべ我身い我等ゞ身ま非べ主人の身當所へも來うべふれ御邊の異見ふうをべ犬死

とるのこゝろべ末代不忠の鬼とふうん然まても小年まへ勝ま一喝量人うふ我等ゞ為ま再生の重恩人此まうまい過ゞ云付やうて酒と温め肴のとめて盃とれば少年も云ふこう彼初獻二獻い禮義もあまとゞ重ゆるゆゞまま下女と酌まて醉こゞま遠山越ま麻中雀さまゞ言葉の末こゞれ玉の林の枝たゝこと互ま親べふふまうまま彼武士硯引寄て

八乙女のまゝうゝらべいゝゆる風ま形そうざんとめゝて見たれば八雲もうちうふゞゝ筆とうて

み面のまゝにふゝとゝ風まうひるんもあゝ

といち早く心の底のいさぎよく彼武士いつゝ絶
うゐてふ〳〵び筆取うる折〳〵も人聲さえら〳〵まし
く何事あるゆと立あがう彼方此方と見廻とべ主
の小左衛門御客様よいまのづまぢ〳〵奥の二階へ御忍
あるとと申ふあう何事ふるやと尋とべされべひ此
程猪の荒ひあう此里人それと獵んと山深く分入
てひし〳〵ゞ誤て狼の産屋と〳〵ゞ踏あ〳〵ひと
て狼多く怒う立毎夜里へ出て人家へ入ひと追と
さあの〳〵あ〳〵然ゞ今宵ハ狼の数例あうも多
くひ定めて間近く來うひてんたゞ〳〵二階へハ大
うゞ上うひらゞ静うゞ是ゞ御座とといそれそハ

雲ゞ色とゝへ夫ハ近頃迷惑ちう然とて左様の獣
のためゞ身と誤たん心もゝ〳〵如何をんと思案
て好々人ハ天地の霊とゝく狼ゝうとて何程うゐ
らん寄ゐ切て切盡し此里人の憂とめんと上う帯
引メて襷とゝけ刀の目釘〳〵ひ志め〳〵待とハ狼知ゝ
ゝ〳〵猛う狂ふて此家の門ゞ數十疋群集うて斗ひひるゞ
ゝう家内の男女あゝてふ〳〵めさ何ゞ〳〵と顔見合を
泣うとゝ〳〵聲の聞ふゝべ狼ゞ〳〵人あうと伺ひ知て戸
口と齧べ梔ゆゞ〳〵抜くゝゐゞ壹疋入ハ二疋三疋續さ
て四疋五疋今ハゝゐ数見へぬゞて入て二階の下ゞふゝち
ゝたう八雲ハう〳〵と見るゝゝも關鍛冶の打ゝる二尺

七寸大業の抜ふり早く真先に進み狼の真向目掛切こめい過たと眉間ゑり咽うけて切割るゑ倒さて死しとけり其跡ゑり只一口ふと大口明て走りめるを飛違ひさま胴切ゑ拂ゑ二川ゑ切放し吠ゑ〳〵ゑと死〳〵と次いて二疋前後ゑり喰付けるとび蹴とび〳〵と又立ゑる其爰とをうさぐ打や拝ゑ〳〵ち横薙ゑ薙ゑと竪割ゑ割付ゑ〳〵く間ゑ十五六疋算と亂と〳〵如くうそ切殺したと い残ゑる狼尾と巻ていづく共ゑく逃失たり小左衛門是体とゝて鬼神も及ぐぬ御働を中ゑもこの切ゑ狼ゑ年經たる老大なり是等とたやと〳〵切殺〳〵むへ〳〵子犬どもゑ逃散てひゑり御蔭ゑて此處の者いゑゑ及ぐ隣村ゑ

ぐもゑ〳〵狼の難と除ゑ嬉しゑ喜ぐゑやとて家内の者どもの手と合を八雲と伏拝ゑ氏神ゑも増る御恩と禮拝〳〵俄ゑ酒のち肴のち思ひゑゑ今宵のつゑれを休めんと打集りて〳〵く海人のさえづり〳〵ゑの〳〵ゑて出てゆゑ良静まれべ夜も深ぬ伐寝の夢と結ぶゑ〳〵と枕と取べ側ゑり〳〵と懸ゑる狼の頭筋ゑ〳〵居ゑ能ゑれべ初ゑ切〳〵老狼ゑ毛ゑゑやすぐ小もたぐぐ伐ゑ〳〵此狼の子なるべ〳〵親狼のめ〳〵ゑて我と孫ゑ〳〵ゑ〳〵や狼ゑ〳〵の中ゑ〳〵べ伐うちも理ゑり人と狼と い品違ゑそれと伐とおのひゑゑ獣ゑらも負氣ゑ〳〵生置べゑゑゑ〳〵孫とも存ぐる旨のゑゑれべ今日いゆゑとと引起〳〵七八間と投ゑとべ狼も得道と〳〵

り起直り此方とうくうこくつ猶山ふうく入るけり
今川義元の兄花倉の良真法印い治部大輔氏親の二男母い福
嶋阿波守女幼りう益頭郡花倉寺ゑ入て薙髪しのちゑ花倉
寺の住職と子う花倉寺法印といゑ然るゑ兄氏輝早世しつ
とい誰う今川の家督とあらんと案じ居さうしぶ法印い二男子
り母卑しとも還俗して内々思くれしゑ其次ゑ禪徳寺の
唱食たうし義元氏輝の同母なりとて是と還俗をしめし故
ゑ義元と良真法印と兄弟不和ゑちう互ゑ弓矢と取しゑ良
真法印うち負瀬戸谷の高山寺ゑ入て自殺とこれ天文五年六月十
日の事也遍照光寺故玄廣恵琛と云書ゑい律宗遍照光寺の
孫子なりと云　重修真書太閤記七編巻之廿五終

重修真書太閤記七編巻之廿六

両雄義と結で兄弟となる事
并河田八雲越後へ趣く事

河田八雲ゲ小脇ゑさしの猛獣も切靡げるゑ山
奥深く逃去て近邊ゑ影も見えぬくていい暫時此
邊をどやうなるんと相互ゑ祝し逢てゑ回りける
然るゑ彼侍い餘念ふくめびさの音高々と肱枕や
やありて目とさまし側近と見ゑいいうゑ年
經し老狼数多く切殺されて血すびとさう餘りの
不思議ゑ仰天しめる騒ぎと夢ゑも知ぬ眠う倒

と恥じさ抑何人うめく計り多く狼と切たるぞ一人二人の業なるべし小人ゝ何とて手も負ふこゝ然すても危ふうゝ車うゝ見ゆゝん語りゝへといたれく八雲い打笑ひ左のこゝ褒めゝ侍い弓鉄炮の箭玉ゝ鎗長刀の林すぐ分行ゝのと誰も知たとひ狼猛しも弓鉄炮わど速うゝうい狼牙利とても太刀やゝと同じゝ兒童も犬い打あくづゝい

ひへども八雲ゝ切たる犬の数十六七のゆひふんといたれて彼武士まゝ驚き是わどの猛獣と手の下ゝ切臥ゝひて薄手一ツ負ゝぬい人間業

とい思ゝれぞ如何ある若君ゝて御坐ゝゆ我邦ゝて い日本武の尊いすぐ童ゝまゝゆゝ時川上梟師と撃ゝひしゝとゝそのゝら聖徳太子十六歳守屋の大臣を誅伐ゝうそれい昔の事なれば誰も見知ぬゝふゝ九郎御曹子のいすぐ牛若といたれ時強盗の張本熊坂の長範と討ゝひゝい曲舞々の綺語ふゝゝ阿新どのゝ本間九郎と討たるい夜ゝ紛ゝて寝首すて然もゝづうゝ一人ゝうゝ是い夫とい車替ゝう畜生なのゝう狼い人も恐るゝ獣なゝう獵人すても三人四人友と集て狩ぐゝその上是い常ふゝ狂ひまゝそれる勢ゝ何ともゝのてあゝ

詮方盡て人こゝのゝ高こゑゝ昇う聲ひその念佛題目
心々ゝ信と疑ひ神明佛陀の擁護と頼む左わど恐
る〳〵其中ゝ些も怖けぬ大丈夫小腕ゝ大太刀打ふ
うゝ切廻ひ切廻ひめくの如くも打るゝ手並
の程の猛々しさ遠くも近くも例と聞ど天晴末代
ゝ現ゝ也ゝ武甕槌の御神うゝあるゝ又經津主の神
の散靈うゝる少年と一川家ゝ宿う合を〳〵身も不
思議一樹の蔭ゝ一河の流おがろぐゝぬ縁あゝと
と深く感じつ歡びつ日々とひ又汲うゝて娯酒玉
の盃底意なくうぞたゝぬ迫廻らゝて互ゝ袂と分
ちつ〳〵とのゝ〳〵ゝ臥處ゝ入び醉たる人の性あゝと

やゝ戸さゝも塞び其儘ゝ眠うゝ付ひゝ人定夜ゝ更
たり沈々と草木もそうと音もとび彼侍ゝ目とさ
ゝ思ひ廻をび扨わど我身武運ゝ盡ひ恥う
しゝ人の包と見定めもとび猥うゝ解ひ身の楚忽
あまたう言出ひ男と立んと思ひひゝ少年ゝ說ふ
せ〳〵ゝて果もとび彼少年の手の内とひ器量と
いひ凡人なゝびと知ゝさうさとゝび彼少年いの
ゝの家いづれの國ゝう仕官ひて世間ゝうる楚
忽のゝのあうさ彼と召仕ふ主人の氣質も知ゝて
うと彼ゞ意ゝ下墨んも口惜や我身一人のゝあう
び主人の上すゝで恥見をて何と此世ゝ住居べゝを

めて潔ぎよく腹切て腰の抜こゝる楚忽の罪を冥土よりゝ父尊靈主君の御魂へ申さけをぐやと思ひ定め始末委しく書記し然後へ押肌ぬぎて袴の腰へ下そぐる斯ると見へ一處へ折るゝも河田八雲い小便の返し脚あゆしの人影誰あるゝんと さしのぞけい彼侍う自殺の体直へ駈ろう脇指を取手も早く引奪ひこい物へ狂ひあゝう何事ぞや名乗ゆを待べ名乗をもとぬ御邊と拙者ふとゝ ことゝう馴あゝと親しく語らふその中へ何の遠慮のあるべきぞ先でうふくぬことなるゝべ不肖なりう某へ錯しても進ぞべし車の子細とゝをあへ

といひしゝうべ彼侍大へ驚き何とゝて某ゞ此体を御存しあうしゆ不審なゝう夜深といひ侍の寢所を伺ひゆへ御邊の御心中盗の為へいゝもあゝゞ我等ゞ首をめゝんとあさて御比怯の御振舞といんべ八雲い言葉を改め事新しき御一言御邊の首が搔たけきべ疾へ搔べき某なゝう又某も侍あう盗をんとへあゝのひも寄べ御邊い醉たる性とゝて戸ざもせねへ此廊下通うゝうとのづゝう御邊ゞ自害と見うけしなゝう楚忽のことを宣ひそといそれて彼武士涙を流し一度ならべ二度すぞも御邊へ必死と救ゝれ我等ゞ仕合あゝ迷ひさう口惜や

いさゐへたつる書のこゝ我等ゞ恥をめさゐんよう此まゝ死をて給ゐへといへゞ八雲い書をきをらう返しゝ篤と能見てたゐい心せゝゝつゝゝて也狂人の御振舞夫そ主人の物たる此身を捨ゐゝ今まゞ受し禄の恩いづゝとの身をそう報じゐふといそれゝゝ彼侍もゝゝゝと泣兄弟も増たる御邊の心中深く恐入のし又恥入てひたゝ今い何とう包むべき某い越後國春日山の長尾為景の郎等ゝ吉江喜四郎と申のなゝ此地へ参りゝも大事の主用抱えし身をつゝの恥を忍びうゝ如斯有様を御邊ゝ見らまゝし恥うゝさと云ゞ河田も打うゐづき然

ゞ某も大事の身なれど打明て語り申さん聞ゐへ某い今川家の庶子すて駿州益頭郡花倉寺の良真法印ゝ仕えしのの河田八雲と申なゝ主人良真法印い今の治部大輔義元の兄なれど毋卑しゝて家督ゝ立ゞ律僧となゝて世を遁ゐゝと義元の近習者ゝ菅西角兵衛といひしのの種々ゝ讒言しつゝ也ゞ義元ゝも疑念を生ゞ兄弟不和となゝし上終ゝゝ菅西ゞ為めゝ法印うをゐゝ某無念骨髄ゝ徹をしゝい菅西ゞ宅へ忍び入角兵衛ゞ首うゝ切て是ゝ持さる箱のうち是御覧ぜゝと包ととさゝし出したる菅西ゞ首こゝの首ゝ駿河領の境ゝ主人

法印無實の罪と雪めん為よ是まで持參しいひ
なり某實兄い岡部五郎兵衛眞幸なり某幼稚なり
河田相模守り養子となり花倉よ仕へくいなりわ
ふ〜こと此事成就とる迫いめつくよ死とぬ某り
命御邊い現在の主君用事某い御過去給し主君のと
の為よおゝむ命い同じ事聞よひゑくや吉江どの
といとれく吉江も納得し然び是ゝ兄弟の因と
結ひ生ふと死も一同よ申通どん河田どのと互
ふ心解ふて又睦しく語り合吉江ゝさ孫て申様
河田どのゝも今い浪人本國へ帰りゝふとも讒者
の舌頭利刀ゝも烈し終よその身と果されんよ

う某と共よ越後國へ御越あとゝ某主人よ取ふし
て相應の身ふゝ申さんと約束堅めそのゝち菅
西ゝ首と國の境よ獄門ようけその傍よ札たてら
車の始末と書記しそれゝう吉江と同道し越後國
へ立越しよ去勇士ゝうゝ三百貫と出しけり八
しけるよ吉江喜四郎ゝ取次すて為景よ目見ふ
雲長尾ふ仕官して次弟ふ軍功とのさぬ禄七千貫
と領し河田豊前守と稱し越中松倉の城主たりそ
の始といつゝ吉江喜四郎ゝ推擧ゝう今の身ふも
なりゝなりと昔と忘ぬ心ゝう魚津の城の後援
ふい籠りゝなり

天文五年河田八雲駿河と立退越後へ仕ふと云へ長尾為景の代なること論ふし同七年四月十一日為景施檀野へ戰死を法名道室嫡子平藏為康二男左平次景房三男喜平次景虎と云景虎の乳母夫を沼田常陸介と云元へ越前の住人なりしを朝倉の為へ浪人して越後へ来りしと為景取立て景虎と養をたり常陸介の嫡子久三郎とび左平次の傳とし二男久五郎とび喜平次へ付らとて天文十一年三月十三日沼田父子謀叛して平藏景康と弑と景康時へ四十歳也景房十九歳二九へふありけると責入てあれと殺と時へ景

虎十三歳ありけると二九の門番小嶋勘左衛門岸六助二人心と合とて板敷の下へ夜へ入て林泉寺へ落しそれより杉尾の常安寺へ入遂へ本庄美作の所へ落し遣しへ三年と過し天文十五年景虎十五歳へ沼田と弓矢と取てせめ十九年の春終へ常陸介と殺して兄の仇と復し廿年正月一日新山へて久三郎と殺し五月廿六日黒滝と責落して久五郎と殺と沼田の亂爰へ至て平ぐ廿二年越中へ打出て父の弔合戰をしなう然べ河田ゞ景虎へ仕ふるへ天文十五年へうと知べし

柴田勝家魚津城を圍む事

并河田豊前守魚津入城の事

神保安藝守父子及び石黒勘十郎い河田豊前守よ
討破らゝと立足もなく打負て味方の陣へ逃入しう
い勝家の手前實よ面目なく赤面てゝ居たりひ
る勝家い神保石黒う召軍とゝ由を具よ聞て両人
と呼出し御邉等い當國の案内者あとゝ勝家も内
内御邉等と頼母敷存じひつゝとゝあと先鋒と打
任て頼ひひつと然るよ河田豊前ゞちうの勢よ
打破らゝと見苦しくも味方の陣へ逃入しゝぞあ餘う
よ云甲斐あゝと振舞とい誰もく存ひひつゝん但勝

家ゞあのゝ處い左よあゝひ能も味方の陣へい逃
入るひしぞあ左様よ不意と討とたゝん時ゝうを
ひい神保父子石黒すでも枕と並べて討死しるひ
るい勝家ゞ為よ大ある損して河田う為りうい分外
の高名たるべくひ又左も無い神保父子石黒すゞ
一方打破うて何方とも知ゞ落るひるゝ是も河田
ゞ名と揚るよ足て勝家ゞ為りい是まゝ損うてひ
なう味方の陣へ逃入るひつとゝ河田もあゝら敵
と打のゝつと何わどう悔しくおのゝらめ且い
如何ある謀りゆと用心して更よ油断とすゞきな
う面々の心りも重ゝその軍よいと本心よ怒を含

て有ならん然れば勝家三人と失ぞるのこなるべし三人の死力と増れ車却て一徳と得さうと申べくひいまへてのく此次の軍よりも決して討死をべうべき幾度も〳〵身をたゞひして始終の勝と心よ入るべくといくれひまべ三人詞ふ〳〵たゞ〳〵俯さそぞ居たりける河田豊前守い神保父子石黒と散々よ掛散〳〵案内知たる山道傳ひよ引行べくふうあふさよ人の影何者ふるゆとと能々見まべ武者一騎馬の首と立直〳〵河田よ向て弓よ矢くゞ是い神保ゞ侍よ會田九八郎久亂るひ主人安藝守父子念なく打負てひふうう御邊たら此道と畠山ゞ陣へ落ふよ

ふ〳〵と存〳〵ひて爰よ待うけ一矢仕るべ〳〵と存ひ越中鍛冶の鏃りて鎧の札を様〳〵へと云ふう早く刀て放をバ過たゞ河田の先よ打さる杼生の四郎頸筋射らまて馬ふうう落河田ふるふう弓引うう放つ一矢ふ會田九八郎真向射さを痛手ふまべ鞍よもたまらうび落てその儘息絶ふう是ふう後ふい敵もなく山路と安く越ゆさて見ふ〳〵向ふふ引両の旗い正〳〵畠山それよ續て撫子い石動山の齋藤ふ是い味方の陣ふるゞ旗さ〳〵セふと下知ふれい庵よ木瓜の旗さ〳〵上馬と早めて打ふゞよ齋藤畠山迎ひよ出て引入いづくも河田ゞ今夜

の行跡と今ゝ始ぬとふ〳〵感心〳〵とぞ聞居たり
良ありて豊前守申ぴるなり敵松倉へ寄び進で魚
津と圍むゝ〳〵承ひるなり松倉と打て出魚津へ入ん
と存し今夜神保と一合戰仕らひ明日ハ魚津へ入
べく存ひ方々も御送り被下べくとありける時齋
藤下野守何様魚津とハ勝家本陣ゝて打圍こひる
し然ハ定めて大勢ふるべし御邊ゞ勢ゝ我々ゞ勢
と合たり共對揚をべき勢るべきさう共魚津を
見繼ぎい謙信公以來取傳へる越後の武邊ハを
たるべし心得ていゝ下野守是非ゝ御送り申べしと
其用意とぞありてひり又勝家ハ神保ゝ河田ゝ破

らるゝと無念ゝおもひ前田又左衛門と本陣ゝの
あゝ勝家自身魚津ゝ向ひ無二無三ゝ責しらとも
城ハいるゝ大將の下知その機ゝ當ゝハ防ぐ兵ハ少
あるゆゑとも寄手の大軍責あぐゝ其上日暮ゝ及し
ゆゑ勝家も夜軍ハ心元あるゝとて引返ひ宮崎の
齋藤畠山ハ河田と魚津ゝ送り入んとなるゝひる由
と勝家聞て推名孫六菊地入道徳山五兵衛ゝ是と
防ぐと下知しつゝ勝家ハ魚津へ向ひひり徳山ハ
宮崎勢ゝ駐向ひ見ゝ佐々内藏助畠山と追つま
らうつ戰ひ居たり斯とみるゝ徳山横筋違ゝ馬
と入佐々大ゝ力と得ゝ盛返して責ひるゝ齋藤

下野守爰と最期と大太刀打ふり〳〵切まくる其勢
よ碎うとて佐々徳山八九段計引退て息と継河田
い椎名よ目と椎て切めくるを菊池入道駈塞うて
支ふるを河田大よ打笑ひ小賢しき入道ぐ振舞や
いで其坊主首打落して呉んどと鎗を以て突めく
るを菊池入道も心得浮川沈の鐙の進退馬の掛引互よ
知たる處なりうまぐ〳〵ぐ程いあらひひるぐ菊池
い左とう老武者なりう河田い壮年とのふよあ〳〵孫
ども世りよ聞えくる勇士なりう鎗と取てい北國第一
とうまりも見えぬ穂先の稲妻如何よりうしけん菊池
入道河田ぐ鎗と受損じ馬と越て下立べ河田太刀

と引抜て首と討んとなりける處へ即等三四人掛
塞う入道と助けて引退〳〵危ふうひける軍なりう河
田い菊池と討めくるとあると見るとく向ふ
よ雁金の旗へ正〳〵栄田ぐ嫡子伊賀守よりる敵ふ
う遁さ〳〵と面もふ〳〵切うくる伊賀守も河田ぐ
ぞと見てけるべ持て開て駈合を鋒こうう火花と散
して戰ふさう伊賀守い荒手なりう豊前守へ古兵い
づれも勇士のとなれべ包めべ破う破るべ包こ揉い
合處へ豊前ぐ弟の河田軍兵衛大長刀と打ふり〳〵
兄と助けて馳めくう伊賀守ぐ手の者と忽三騎駈
倒し勇ましよ勇んで切て廻る前田又左衛門尉よれ

と見て柴田うとをて叶ちぐと真先に切めくるべ
畠山義春こゝへ我等に任をゐへと前田に向て息
とも繼とおめいて切めくるに又左衛門尉是い能登
國の畠山に一人も殘さず取圍て討やの共と下
知して魚鱗に進めば畠山味方と下知して彼へ
聞ふる前田又左衛門尉なり一所に打寄中と破る
中と破らば左へ切めくるに賢々しげに定めて鎗
の穂先と打そろへ扶先めくるに突て切めくる前田
勢も兼てより畠山が軍立とび能知たり鶴翼に開
いて引包んとなりけるに畠山い勢と二川に
づと引分前田が鶴翼の陣と駈破らんと進らけり

是等の間に河田豊前守前田柴田が勢の中と真一
文字に突破り魚津の城の北の方搦手の門を目に
うけ乘けるとあるとゝ云ども誰一人是と止
むる人もなし豊前守が心のまゝに門の際へ寄し
と見て城中より門と開き愛度ゆと色代し河田
が勢と迎へけり齋藤畠山い兼てより河田と魚津
へ送うんとと主とそれば今いくの宮崎勢の切成て
う左のこいとて元の處へ引うゝ兵糧つゝひ馬
に草うに人馬とまぐ休めけり
上杉三代軍記に永禄二年九月輝虎泉州堺津見
物あるて皈國の時江州守山に宿るとけるに宿

の川田九郎左衛門ゞ子岩鶴丸美童たるよ
ゝ受て小性と〻ゝ後ゝ川田豊前守長親と云越中
魚津城主たり同廿六日越後へ帰城ありと見へ

重修真書太閤記七編卷之二拾六

重修真書太閤記七編卷之二拾七

柴田勝家猛勇と顯て〻事
并上杉方諸将接戰の事

去程ゝ宮崎ゝ屯したる上杉方の畠山齋藤両家ハ
河田豊前守と魚津城ゝ送入れと三手ゝ備えて打
て出れ〻ハ上方勢ハ是と支えんと前田又左衛門尉
徳山五兵衛尉柴田伊賀守面もふ〻切掛る然ど
も河田豊前守ハ聞えたる勇士なり今日を期と戰
ふわどゝ上方勢念なく打負けるゝよりう河田ハ本
意の如く魚津城ゝ駈入吉江と一つゝありて城を

守る柴田修理進勝家へ佐久間玄蕃允と一手よふ
う魚津の城を取圍こと大手搦手短兵急よ攻付既よ
大手の門を打破らんとする時後陣の味方亂れ立
けるふ〳〵勝家何事ゆゑんと見うへ出いたい
うふ上杉方の宮崎勢の大将齋藤下野守ぐためよ
佐々内藏助成政散々よ打破られ佐々ぐ二階笠の
馬印勝家の後よ扣えし佐久間玄蕃允ぐ備へふぐ
出やう〳〵る佐久間ぐ勢い敵と〳〵の〳〵違へいぐ追散
さんと駈向ふと玄蕃允是を制し味方ふふぐ過を
ふと下知とる處へ齋藤下野守漏さじと追詰
切やう〳〵る佐久間玄蕃允い佐々ぐ勢と弓手へ廻

成政自分鎗を取齋藤下野守を目よりけ突やう〳〵
火花と散〳〵て戰ふ〳〵う勝家い魚津の大手よ攻寄
攻寄揉よのんで切やう〳〵只今門タの逆茂木を引
破りて籠入んとすりけるぐ後陣の味方の崩うを
見て何といふても若き者の軍の様い弛きぞ勝家
向て切崩し腰抜どの〳〵目よ物らをて呉ぐやと云
ふ〳〵早く駒の首を立直をば城中ふうらと見濟
齋藤下野守と援くぐい長く弓矢の瑕といそれ
ん勝家ぐ跡を慕ふて喰止るや人々と諫め立ばば
藤九新助安部右衛門三百餘騎城門を押開き大浪
の寄る如く柴田ぐ跡を突伏〳〵慕ひけり勝家さ

しと急度見て悪さ城兵の軍ぶりや左程我等ゞ相手よなりたくい相手よろうて遣べしいでくと云まゝ安部右衛門よ馳向ふ安部い勝家と見てけしへ越後侍よ安部右衛門近春と名乗るやいふ十文字の鎗と以て只一突よと突うしとべ勝家大音あげこの修理進よ鎗を付んといきろうしや但汝ゞ鎗よさゝるゝ勝家ゐらべれや組んと馬を打寄るゝと安部い組しゞと馬よ鞭うち引分しやゝ繰出し鎗の塩首と勝家ゐつうと手よ取て手元近く引寄んとし安部い寄じゝと太刀抜持て横よ拂へべ勝家ゞ馬の胸懸切破り馬い胸を切して倒るしべ

勝家ひらうと下立鎗取のべ安部ゞ胸板と下と突あゆまるゝべ胸板と立上の間とゞざと突抜し馬よう落て二言といゝべ藤九新助あれと見て通さゞのゝと駈向ふ勝家これと見るのうも誰うとわのゝべ藤九新助我よ掛らんとい蟷螂の斧ある物々しゆと嘲うゐゝ安部を突たる鎗引うゝ藤九ゞ眉間めるうけてつゝと突餘うよ強くや突たりひん勝家ゞ鎗の柄中ろうわつさと折新助得たり と馬うけ寄太刀と抜持一打と打と逃して弓手と のゝ新助ゞ押付の板と引ちうゝ真向ろう只一刀よ切付しべ兜の天邊ろう胸板うけ二りよ切し

て死してけり是を見て城中より若林九郎左衛門
石田采女正續いて駈出勝家一人を取うとみ我打
取んと責たりけり宮崎の勢ハ豊前守と送り課を
し跡ていあり下野守を討せて武士の意地之ど
續けの者共打ゆ人々と互ゑ諫めつ諫めらるる我劣
ちゞと責うゝとゝび上方勢の中にも徳山五兵衛
佐々討とゑ續けゝと競めゝる下野守ゑ後より石
動山城守願ふ處の敵なりと聲と揚つゝ徳山ゑ向
ふゝう

上杉三代軍記の説ゑハ安部右衛門天正十年六
月二日自殺十三人の内とゝ

石動と徳山とい元來知人ゑり日頃の詞を恥たゝ
ゞ互も引ゑ引ゞと戰ふゑどゑ太刀の鍔音天地ゑ
響らてゝおびたゝゝ柴田伊賀守ハ推名菊池と援け
て畠山ゑ向へゞ畠山ハ先刻より前田又左衛門と
懸つうけらるとゝ一交もを戰ひける其体雙方牛
角の軍すゝと更ゑ勝負ハ見へざりけり然るゑ内
藏助成政齋藤下野守ゑ追立らゑ散々ゑけりて引
退けゝ上杉勢勝関を作りて追うけたり石動山城
守も徳山と追つまゝくりゝ切てハ進ゝ進ゝてハ討
ゑ或ハ組て差違へ又ハ組ゝて首と取もあり又取
るゝも有ける處ゑ上杉方の河田軍兵衛上方勢の

物頭推名孫六と打とり其勢と拔さゞ柴田伊賀守
よ切てめゝる又畠山う手へ前田の先鋒前田孫四
郎利長切めゝう息とも繼ど戰ひ居けるゞ軍兵衛
と見るゝのう利長討て今日の手柄よをゞゆとて馬
と躍と鎗と合と軍兵衛今朝ゝうの戰よ氣疲と腕
ゝはうゝゝう〳〵念ゝの〳〵突まけく引退く上方勢是よ
力と得柴田伊賀守前田又左衛門一手よりうて推
めゝる然るよ徳山五兵衛い石動山城守よ揉立ら
と五兵衛忽打負西とさゝて十餘町引て行前田又
左衛門尉是と見て我勢と引分山城守ゞ後ゝう切
てめゝる徳山あれよ氣と取直守返さんと踏

め踏めゝ戰へ〳〵石動とゞよ色めいて見えける處
へ畠山義春柴田と〳〵打捨石動討をて叶ら〳〵と前
田徳山の間と目よりうけ切て懸る柴田へ河田ゞ跡
よ付て攻懸たり齋藤下野守い佐々と切崩〳〵氣色
くゝふて居たると見て神保安藝守よき敵ゝう討て
昨日の恥と雪めんとおめき叫んで切てめゝる下
野守是と見て天晴名譽の齋藤と討んと前むりゝゆ
さゝとあざ笑ひ四尺餘りの大太刀と以て横よ拂
くれ安藝守無慙や馬ゝう下へ胴切よ切落されて
死〳〵てけり安藝守ゞ嫡子清十郎氏宗生年十八歳
眼前よ父と討とりうへ少も猶豫をゞき真一文

字ゑ下野守ゑ打て〻〻る齋藤是と見て優〻さ人
や然ふぐ〻軍の場ゑい復讐といふこと聞及ぐぐと
云ふ〻〻ゑ清十郎げ上帯つう〻て中ゑ引提弓杖二
十丈ぐらう前ゑ扣えて〻る敵の中へ乗ひゆとゆの
て投たりけり是と見人あふ夥しの勇力やと舌を
ふるうて怖あへう佐久間玄蕃いう〻と見しうう
馬と走を寄合をんとあゆとも敵味方の勢ゑ隔
て〻ゑとてそれも叶ふ〻ぐ勝家い藤丸安部と打取し
處へ石田若林前後ゑう突め〻ると見て勝家大音
揚東海道すて鬼柴田と云られし我と知ぐ近ゑう
て命失ふ〻ゑ手柄の程とたしうゑ見て炎魔の廳

の訴へゑをゑと四尺五寸の中巻取て拵向ひ若林
とび右手ゑ受石田を左手ゑ只一薙と力ゑ任せて
薙立しゑ若林九郎左衛門弓手の肩先さゑ上て引
て行石田も今いたまうう〻城中さして引返し勝
家續いて付入んとをし處を雨の如く打出ぐ鉄炮
ゑ射ぎ〻まされさ〻も猛き柴田修理進馬と走
を六七段引退くと見て畠山義春あ〻ぐまりとぞ
追掛たり勝家何条其方共ぐ悪手合と云さゑ取て
返しぎうぐ佐々前田徳山いづとも劣らじと續き
たり此勢ゑ辟易し上杉勢總敗軍とをうゑけり齋
藤石動踏止りて戰ふとして上方勢我打取んとて

やうけるを前田又左衛門尉是を制して追ひ
び窮鼠にうへて猫を嚙日に既に黄昏なり案内
しらぬ此山路敵よいうなる謀りや有んぞうん其
上に軍に今日にうぎうぐうと明日もあり鋭氣を養
ひ後日の勝ちを始終の勝ちと諸手をそろめて引
上たり織田方すてに神保安藝守父子をぐるめ三
百七十餘人うるべし上杉方よりも藤九新助安部
右衛門以下四百五十餘人ぞうるしけり
流布本若林九郎左衛門尉勝家に討るゝ由を注し
し然るに六月二日落城の日自殺十三人の内
なれば誤りと知べし

亀田建部菊池ゞ陣へ夜討の事
并上杉景勝魚津表後詰の事

魚津の城中すてに四月廿九日の合戰に味方多く
討死したりしかども共河田豊前守難ふ〳〵入城をし
悦び藤九安部の戰死を歎き若林ゞ手負を養ひふ
どゝて後軍の事實と春日山へ注進し大將景勝早
早出馬あらるべしとぞ記したり寄手よりも神
保安藝守父子戰死して此手の者とも本國へ引返
とゞ上方勢も敢て城を責んとをゞ七八日ゞ程ハ
足輕ぜり合も無うしけり然るに城中にてハ建部掃
部久亀田小三郎両人密に談合ひるハ去廿九日の

合戰双方牛角の軍したりと云もの〻味方の戰
死寄手ゑうゐ些多〻それのこなるべく寄手の大將
勝家大手やのぐ近々と打寄て荒言しつるも心悪し
いざや我等う勢ぐうゐく寄手の陣へ一夜討し
頃日の眠と覺せぐと思い如何と裏どへい兩人
最可然と決断し天正十年五月三日の夜雨風烈し
さと幸として亀田建部う手勢とくりて二百五十
餘人馬の七寸結て戌亥の始ゑう城中と紛れて出菊
池入道う陣へ押寄たり入道い此國の案内者あり
山手ゑ添て陣と取是い深山越ゑ加州への通路ゑ
且い薪草の便利あると知いなり去ども本陣と

いちと引離して遠うゐう亀田建部い近々と打
寄て鯨波と造り松明と投入〻〻たりしゑへ忽
菊池ぐ小屋〻〻燃上ると見て夜討の兵柵と破り
て入入ぐ菊池ぐ陣中以の外ゑ狼狽し上と下へと
混亂しける理や此四五日双方勞と休めて居たる
上今夜い雨も強ひ〻ぐ蛍ゑう外鳴虫もふしと最
しめゆうゑ打解たりし夜半のこと闇さい闇し寝と
びて大刀ゑ刀ゑ物具ゑと騒ぐ廻ゑて笑止ふう
其上馬い寝絆ゑ飼とべ付つそれ鞍と置ども羈ゑ
たうひぐ菊池入道ゐれと見て敵い小勢そ歩武者
多〻相打とるゐ兵共と駈まそうて下知とると亀

田小三郎くるうを見て是ぞ當陣の大将菊池入道
ぶざなるぞと走寄九尺有餘の鎗ひつさげて真一文字
に突かゝる入道ども見て孫に等しき若輩の
推參至極と立向ひ二尺五寸の太刀抜うざ〻切拂
ひ切拂ひ付入るを亀田い入〻と突廻し〻ゑ〻
けるを菊池い老人息切て打て開くと得たりと亀
田が突鎗を肩先突とをるめくと付入〻突臥て首
とゞ亀田の從者が取て鞍の取付に着たりけり夜
討の勢い是をみて素破大将の一番首我劣らじと
切廻る寄手の陣よい菊池入道討とゝしうゞ此手の
勢い裏崩と山路をさ〻て引退き役所〻へ焼立ら

れ餘炎玉薬に移り〻〻ゞ忽に百千の雷が一所に
落る如く響き渡りて敵し菊池が陣に繼きたる德
山五兵衛是を聞何樣入道が陣へ夜討の入〻と覺
えさう捨て置べき事ならじと云ふ早く鎧を取て
肩に投うけ鎗追取て走出し菊池が陣へと寄來る
亀田い我手の勢を集め菊池入道をゞ打取たり夜
討い勝ぞいざ引返さんと操引に引うけたるを見
て德山五兵衛一陣に進み惡し越後侍め夜討にう
めう十分に働き其儘に引取とても引とゞめらゞ返
を返をと呼ふ〻〻鉄炮を打うけ〻〻のとも兩方に
く玉薬をこめりて用たゝゞ五兵衛怒て鎗を入るゞ

建部掃部介弓取て矢種おしこめ射るわどみ徳山ゞ勢ひ〳〵して多く射斃さるしうべ五兵衛やもと〳〵怒りて獅子の子の荒るゞ如く進み来る建部いさましゞ敵と十間ばかりに引そけ引取〳〵射ける わどみ徳山ゞ兵士建部ゞ矢に當りけり建部ゞ手の者十四五人引續きて射たりしうべ徳山も進み得ぞ亀田建部と呼とりて勝軍に仕たり夜討の作法なり早引もへと迎と立ぞび建部うこまりて いと返辭しゞ徳山を射て落さんと思ひしうべ猶踏止りて射るわどみ徳山い又建部を討んと鎧と入る建部近々と引付て切て放をび誤たゞ徳山ゞ弓手の肘に中をび思ひをび鎧と取おとゞ建部一の箭射損じ心をき矢継ぐゆに二箭と射をび徳山ゞ運やつよめりけん徳山ゞ身を外ぞ後なる松の立樹に鎧中をめて立たりけり是を見ものわふあびたゞ〳〵の弓勢や此箭に中りて如何ふる者ぞ命を捨んおそろしゞと舌を振ふて怖あへり五兵衛中のもゞ氣力を加兩を凌いで馳掛り建部ゞ手元へ近き投突に突しうい建部鬢と突ぞ足並亂て見えしうべ徳山ゞ郎等走寄首をとゞんとする處と建部ゞ隊の侍ゞ射る箭に真向射貫ぞ尻居ぞ倒ぞて音もをび五兵衛い郎等ゞ倒るゝと搔拭味

方の陣へ投入たり此隙に建部い辛き命を助うて味方の中へ走入城中へ引返をび夜いのぐと明るひう徳山も牙とうとあぐ〳〵雨いつ〳〵途い泥濘て滑るるう心計い猛ひもど力ゐ〳〵我陣所へと引返こ城中るていい夜討〳〵て菊池入道ぐ陣を焼入道と討捕しうび此頃の鬱氣と散ぢーのこゐらび十分の勝軍してひうと打寄〳〵談う合亀田う鑓の短〳〵と手柄をしい如何ふる故そと若さのるの問ぢて小三郎左ぢいい一年甲斐の國ゐ御使ゐ罷越ていひし時原隼人ぐ家と旅宿と定めらる原い名誉の武邊者なうう或夜話の次ゐ問ていひゐ原

ぐ申さ〳〵足輕の鎗い長さゐ利のあるのゐひ侍の鎗い九尺ゐ過さぐれと法性院殿い定めゐへう如何ゐといふゐ足輕い鉄炮の炮の絶間ゐ鎗と入て扣さたつると能とするるう外ゐ用あ〳〵ぐ然べ二間う二間半三間あうても事め〳〵ぐ侍い膝と膝との合ふわどい刀の勝負と知べきなう遠侍うう門の内ゑ太刀打刀で濟をへ〳〵門の外てい中巻長刀そ〳〵う遠さい鎗ゐ利あう鎗と九尺と定むるい我身と去ると六七尺ゐその勝負故と思ふべ〳〵鎗ゐう尺の延し時弓ゐて勝負とをるのの古さのの申てひ穴う〳〵こ他ゐ漏〳〵ゐひそと語う

ーと實のと存ー柄と九尺ふ作りてひひーぐい
ゆも遣ひ〳〵覺ゆと云べ若人感心ー初て鑓の德
と知と談う〳〵て籠城の慰め草とのとくゆと去ふ
めゞ〳〵寄手ハ日々ふ勢增う城中ハ次第ふ兵士減ー
氣力も追々勞ととうゆくてハ籠城覺束ふー早く
御出馬あるべ〳〵ゆと注進くしの歯と引ゞ如〳〵ふ
うーうゞ春日山すとも諸將寄集う誰をう加勢ふ
差向んと評定ありけるふ景勝自身向くて叶ふふ
ゞ然ゞ打立ゆの共と陣觸ありける其夜ふ大將
風の心地とて延引ふ及びけゞい先先鋒だうと
出されける處へ畠山石動齋藤ゞ許ふう宮崎ふて

の軍の次第詳ー〳〵注進ーたりけゞハ景勝ますと〳〵
をさ立與板の城主直江山城守兼續と先鋒とー宇
佐美駿河守同ー〳〵嫡子民部少輔定房と左ふ備へ
長尾伊賀守政勝と右ふ備へ旗本ふハ倉田名山佐
口松本生駒本卿夏目宮内と前後二備へふて四
千七百騎後陣ふハ九田伊豆守本多彌兵衛小荷駄
と支配ーて五千余騎春日山と打立て名立能生へ
押出ー鬼伏へさ〳〵う〳〵宮崎の後なる越中國天
神山ふ馳着成願寺川と前ふ當て大岩寺ふ陣と取
織田方すてい是と聞越後武者い馬強ー用心をふ
ゆと陣々の前へ柵と結てどうろうけさう

音伴之アヤマリハ 夏ノアリ
鳥居ノ城ヲ攻メシニ 君ノ山ノ立花ヲ
考ルバカリナシ

仕

作者君ノ山ヨリ生ズ 出立ヘ出立花ヲ
天神曲ヘ着スレバ アヤマリナリ ミカンノトナラバ
ちゑ川ハ 敵情ヲ ちゑ神山ハ 義伴ナリ
ヨリゴウ

重修真書太閤記七編卷之二拾七終